

## 「信仰年」と私たち (III)

主任司祭 吉池 好高

ベネディクト十六世教皇様の御退位の報道は、バチカンから遠い日本の教会のカトリック信者である私たちにとって、あまりにも突然と思えるニュースでした。教皇様の自発教令「信仰の門」の呼びかけによって開始された「信仰年」の最中の教皇様の突然の御退位の発表は、教皇様の呼びかけに応えての「信仰年」に対する私たちの取り組みにとって、大切な支柱が失われてしまったような感を否めません。けれども、御健康の著しい衰えを自他共に認めざるを得なくなられた教皇様の苦悩の決断と勇気あるその発表は、教皇様が担っておられる教皇としての数々の重責の中でも、「信仰年」のことが教皇様の念頭から離れなかったからではないかと推察されます。第二バチカン公会議開始五十周年を期して教皇様が全世界の教会に呼びかけられた「信仰年」の実りを、教皇様は何よりも望んでおられるはずです。その実りを全世界の教会に形あるものとしてもたらすためには、御自分の健康状態がもはやそれを許さないことを、教皇様は何よりも苦慮しておられたのではないかと思います。日本の私たちにも大きく報じられた前教皇ヨハネパウロ二世教皇様の最後のお姿は私たちの記憶の中にも強く残っています。バチカンの広場に埋め尽くすようにして教皇様の御快癒を願っていた大勢の若者たちの姿を思い起こします。全世界の信者たちが敬愛する教皇様とは、そのようにして、その御生涯の最後の一刻までも教会のために捧げ尽くされるのだと思っていた多くの私たちにとって、ベネディクト十六世教皇様の今回の御退位発表は正直ショックだったかもしれません。けれども、教皇様が述べておられるとおり、神から託された教皇職が持つ神と教会に対する責任の前に膝を屈めるとき、教皇様お一人の思いを越えて、今回のことは、教皇様の神の御前における十字架の道への最後の御決断であったと拝察すべきではないかと思えます。「神よ、私にはではなく、あなたに栄光が帰せられますように。私の願いではなく御こころが行われますように。」

御病状の進行の中で教皇様は「信仰年」を神と私たちの教会に託されたのです。